

デザインが面白くなると  
産業が活性化する

[第49回]

プロダクトデザイナー

小牟田 啓博 さん

スペックや機能ではなく、デザインで選ばれる商品を作りたい——。  
プロダクトデザイナーの小牟田啓博さんは、  
常識を打ち破ったデザインの携帯電話を世に送り出し、ヒットさせた。  
小牟田さんはデザインにはマーケットを塗り替える力があると考えている。

2003年11月、auが発売した1台の携帯電話が、日本中を驚かせた。「au design project」の第1弾モデルとして登場した「INFOBAR」は、当時の主流であった二つ折りではなく、バータイプのフラットな筐体とファッショナブルなカラーリングが特色で、売り切れの店舗が続出するほどの大ヒット端末となった。小牟田啓博さんは、KDDIでau design projectを成功に導いたデザインプロデューサーだ。

エンジニアだった父の影響もあり、自然とプロダクトデザインの道を進んできた小牟田さん。多摩美術大学のプロダクトデザイン学科を卒業後、メーカーのデザインセンターに入社した。同社では、主に電子手帳やワープロなどのプロダクトデザインを担当した。

「まだモバイルという言葉もなく、まさか電話が外に持ち出せるようになるとは想像もしていなかった時代です。人に一番近くて、便利で、愛着を感じる対象物。そんなものを作るのが目標でした」

90年代半ば、今のモバイル・デバイスの原点とも言えるハードウェアが次々と登場し、急激にモバイル技術が進化を遂げる時代の真っ只中だった。

「1998年にAppleが『iMac』を発表した時のことをよく覚えています。従来のパソコンのイメージを覆し、消費者市場向けに振り切れたことでデザインが面白くなった。デザインが面白くなると、その産業は必ず活性化します。どんどん新しいハードウェアが出てくる中、デザインの最先端のものを手掛けたいと考えるようになりました」

2001年にKDDIに転職。前例を見ない通信キャリア所属のデザイナーとして、製品のデザイン面からのディレクションを担当する。消費者に選ぶ楽しみを感じてほしいと、シルバー系統がほとんどだったカラー・ラインナップに、イエロー、オレンジ、グ

リーンといったバリエーションを用意するなど、auのデザインに新しい風を吹き込んでいく。

「auを世界で一番カッコいい通信キャリアにしたい——そう思って立ち上げたのが、au design projectだったのです。“少しくらい高くても、デザインで選ばれる”、そんな携帯を作りたいと考えました。それを実現するには、僕程度のデザイナーでは駄目。世界の超一流を起用する必要があると考えました」

後に世界的なデザイナーとして名を馳せることになる深澤直人氏をプロダクトデザイナーに起用したINFOBARは、2001年にコンセプト・モデルが完成した。そこから発売までは2年を要したが、想像を超える大ヒットを記録し、auの業績やブランディングに大きな貢献を果たした。

「デザインだけで売れたら苦労しない、と言われたこともありましたが、でも、これはauだけではなく、モバイル業界全体にとって起爆剤になると信じて疑いませんでした」

モバイル業界に「デザイン革命」を起こした小牟田さんは、その後KDDIを退職し、デザインコンサルティング会社Kom&Co.を設立。携帯電話だけでなく、モバイル・ルーターやモバイル・アクセサリー、スピーカーなど幅広い工業デザインのディレクション、プロデュースを行っている。

「若い頃は自分のため、あるいは勤務先のお客様のことを考えながらデザインしていました。しかし今は、何よりマーケットの役に立ちたいと思っています。僕らデザイナーには、産業や世の中を素敵な方向に導いていく義務がある。これからも消費者にわくわくする選択肢を提供していきたいと思っています」

#### こむた よしひろ

1969年神奈川県生まれ。多摩美術大学プロダクトデザイン専攻卒業。1991年、カシオ計算機のデザインセンター入社。2001年よりKDDIでau design projectを立ち上げINFOBARを大ヒットさせるなどデザインを通じて同社の携帯電話事業に貢献する。2006年Kom&Co.を創業、2008年Kom&Co.Designを設立。

